

5	小牧	○小牧市立味岡小学校 保々 孝明 小牧市立味岡中学校 山田 啓太 小牧市立小牧中学校 杉本 和希
分科会番号	3	分科会名 社会科教育（小学校）

研究題目 「社会の形成者としての自覚を高めることができる児童生徒の育成」

研究要項

1 はじめに

平成29年に改訂された学習指導要領における社会科の考え方として、中学校社会科の解説には、「主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成」と示されている。グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、日々社会は変化しており、児童生徒は、将来の予測が難しい時代を生きている。そのため、よりよい社会の在り方を考えたとき、一人一人が現状に満足することなく、社会に参画していくことが小学校でも中学校でも必要であると考えた。小牧市社会科教育研究会（以下、「本研究会」と称する）では、このことを実社会で起きている出来事にも目を向け、社会に見られる課題を把握してその解決策を実践しようと考えたり、よりよい社会を形成していこうとしたりする態度を育成することと捉えた。そこで、本研究会では、令和3年度から「社会の形成者としての自覚を高めることができる児童生徒の育成」という研究主題を設け、児童生徒が社会的事象などの意味や意義を考察するだけでなく、自分と社会との関わり方について、自分なりの考えをもちながら、学びを深めていけるような社会科授業の実践を追究してきた。

2 研究のねらい

(1) 目指す子ども像

社会科の学習内容はもちろんのこと、自分が所属する集団や身近に起きていることに対して、主観的に捉え、自ら社会の形成者としての自覚を高められる児童生徒

(2) 研究の仮説

当事者意識をもって社会的事象を捉え、社会的な見方・考え方を働かせながら深く思考し、選択・判断・表現したり、身近な地域や社会で起きていることに対して触れたりすることで、社会の形成者としての自覚を高めることができるであろう。

(3) 研究の方法

手だて① 児童生徒が当事者意識をもつことができるような教材や課題の設定

児童生徒が社会的事象を自分のこととして受け止めるためには、まず、興味関心や切実感などをもちさせる必要がある。そのために、身近で自分とのつながりを感じることができる教材や課題設定を行う。

手だて② 社会的な見方・考え方を働かせながら、深く思考し、選択・判断・表現することのできる場面を設定する

児童生徒が社会的事象に対する課題や解決策を考える上で、選択・判断・表現できる場面を設定する。その過程で少人数での話し合いや全体での意見交流など、他者との対話的な活動を取り入れ

ることで、多面的・多角的に社会的事象を捉えさせていく。

手だて③ 社会的事象や課題に対する自分の考えをまとめる振り返り活動

社会的事象や課題に対して、自分だったらという視点を児童生徒にもたせ、振り返りを行う。これを継続的に行うことで、新たな考えを再構築し、社会的事象に対して具体的な考えをもったり、行動を見直したりすることができるか分析する。

3 小学校授業の概要

(1) 単元名 戦国の世から天下統一へ（9時間完了）

(2) 授業実践前の実態

本学級は 32 名の児童で構成されている。社会科の授業が好きな児童が多い一方で、社会科の学習に興味や関心が低い児童もいる。社会の形成者としての自覚を高めるためには、まず社会に興味をもたせることが大切である。

(3) 単元の学習目標

本単元では、織田・豊臣の天下統一を手掛かりに、戦国の世が統一されたことを理解させる。また、織田・豊臣それぞれがつくった町の様子を手掛かりに、戦国時代での町づくりの構想を表現させる。戦国時代の学習であるが、児童が当事者意識をもって学習に取り組めるようにしたい。そのために、児童が社会とのつながりが分かる身近な題材を教材にすることや社会的な見方・考え方を働かせて深く思考し、選択・判断・表現する場面の設定、自分の考えをまとめる振り返り活動の取り組みなどを行った。実際の授業では、織田信長が築いた小牧の町を取り上げ、「戦国時代に、自分ならどうい町をつくりたいか」という単元課題を設定することで、社会の形成者としての自覚を高めていくことを狙い、学習を進めていった。

(4) 単元の指導計画（9時間完了）

※本文中における下線部は、社会の形成者としての自覚を高めることを意図した手だてのいずれかを示す。

_____ 手だて① 児童生徒が当事者意識をもつことができるような教材や課題の設定

_____ 手だて② 社会的な見方・考え方を働かせながら、深く思考し、選択・判断・表現することのできる場面を設定

..... 手だて③ 社会的事象や課題に対する自分の考えをまとめる振り返り活動

時数	学習課題	学習過程
1	戦国時代に、自分ならどうい町をつくりたいか、考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>戦国時代に、自分ならどうい町をつくりたいか、考える。</u> ・<u>立場を意識して、自分ならどうい町をつくりたいか、再び考える。</u>
2	信長と秀吉の町づくりについて調べたい事を、出し合おう。	<ul style="list-style-type: none"> ・戦国の世の様子について調べる。 ・信長と秀吉の業績を年表にまとめる。 ・<u>わからないことやさらに調べたい事を出し合う。</u>
3	信長がつくった小牧の町の様子を調べよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>信長の拠点の移動について、位置や時間の経過に着目して考える。</u> ・<u>信長が築いた小牧の町の特徴について調べる。</u> ・<u>小牧と安土の町の様子を比較して、似ている点を考える。</u> ・<u>信長が小牧の町づくりについて、こだわっていたことを考える。</u>

4	信長がつくった小牧の町から学んだことをふり返ろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>信長がつくった小牧の町についてふり返る。</u> ・<u>自分ならどういう町をつくりたいか、考える。</u>
5	戦国時代の日本と世界との関わりについて調べよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・日本にキリスト教や鉄砲がやってきた時代の様子を調べる。 ・南蛮貿易によって鉄砲やカルタなどがヨーロッパからもたらされたことを理解する。
6	堺の町について、商人の立場から調べよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・堺の町の様子について調べる。 ・<u>信長が堺を支配しようとしたとき、自分が堺の商人ならどうするか考える。</u> ・<u>堺の町についてふり返る。</u> ・<u>自分ならどういう町をつくりたいか、考える。</u>
7	秀吉がつくった大阪の町について調べよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪の町から様々な商人を見つける。 ・<u>大阪の町がどのように栄えたのか考える。</u> ・<u>秀吉がつくった大阪の町についてふり返る。</u> ・<u>自分ならどういう町をつくりたいか、考える。</u>
8	秀吉の全国支配について調べよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・秀吉が全国をどのように支配していったのかを調べる。 ・秀吉の全国支配についてふり返る。
9	戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか、もう一度考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで学習したことをふり返る。 ・<u>戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか、考える。</u>

4 研究の実態①

〈第1時〉戦国時代にどういう町をつくりたいか、考える。

第1時では「戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか」と問いかけた。「自分なら」と立場を意識させる発問をすることで、児童が当事者意識をもって町づくりについて考えることを狙った。

T：戦国時代に、(自分なら) どういう町をつくりたいですか。

S：戦いに強い町をつくりたい。

S：土地が有利なところで町をつくりたい

【資料1 授業記録】

このように「自分なら」と立場を意識させる発問を投げかけることで、町づくりについて当事者意識をもって考えることができ、考えを深めさせることができた。

〈第2時〉信長と秀吉の町づくりについて、調べたい事を考える。

導入では、長篠合戦図屏風を提示し、鉄砲が数多く使われていること、さらに多くの鉄砲を調達できる信長の経済力に注目させるために、「絵図から様々なことを見つけよう」と課題を提示した。児童がたくさん鉄砲が使われていることに気づいたところで、そこから信長の経済力へ自然と興味が移っていった。わからないことや調べたいことを出させ、多角的に当事者意識をもって学習に向けることができた。

〈第3時〉信長がつくった小牧の町を調べよう。

第3時では、児童が住む小牧と、信長の町づくりのつながりを意識させ、町づくりについて深く考え

させることをねらいとした。信長の拠点移動を伝え、児童が小牧について考えることを狙った。児童からは「どうして小牧を3年で去り、岐阜へ行ったのだろう。」「小牧の後は岐阜に行っているから、岐阜が見える小牧に来たかったのかな」など、児童からは位置や時間の経過に着目した疑問が自然と出され、小牧の町を調べた。資料2を見ると、児童は家の配置や家の間の水、道などの資料から、町

- ・山のほうの家は大きいから、信長や家臣の家かな。
- ・武士や商人の家、お寺が集まっているけどどうしてだろう。
- ・家と家の間の水はなんだろうか。
- ・山へ続く道はまっすぐだけど、どうしてだろう。

【資料2 授業記録】

に住む人々の生活について考えていることが分かる。授業の終盤では、自分の考えを整理し、新たな考えを再構築させるためにふり返りをさせた。また、ふり返りを見ると児童Aのように武器や生活など多面的な視点で信長の町づくりを捉えている児童がいたり、児童Bのように住みやすさの視点のみで書いていたりしている児童もいた。そこで、為政者である信長の立場で詳しく考えさせるために、「れきしるこまき」の職員をゲストティーチャーとして招いた。

児童A：鍛冶屋が多いのは、武器をたくさん作っているからだと思います。また、家と家の間の用水路みたいなものは、家につながっていて使えるようになっていると思いました。

児童B：道がまっすぐなのは、家の位置を分かりやすくするためにだと考えました。

【資料3 ふり返り】

ゲストティーチャーは家の配置や防御、住みやすさなどの視点で小牧の特徴を調べていた。さらに考えを深めさせるために、安土城の城下町と小牧の町について社会的な考え方である「比較」をさせ、似ている点を調べさせた。児童は「小牧は山で守りやすくなっているが、安土は川や湖で守りやすくなっている」



【ゲストティーチャーの授業の様子】

「川で物を運ぶことができる」など、防御や交易などで似ている点を見つけた。そして、以下のような児童のふり返りが見られた。資料7を見ると、町づくりについて商業や住みやすさなど多面的に為政者である信長の視点で考えることができた。

- ・商業が盛んな町を支配することで、武器を手に入れることができた。
- ・安土城も小牧山城も湖や川の近くにあり、そこを信長はうまく利用していた。住みやすく、様々な立場の人が安心して住める町をつくることで、信長は人々から信頼されていたと思いました。

【資料4 ふり返り】

〈第4時〉信長がつくった小牧の町から学んだことをふり返る。

第4時では、前時までのふり返りを見て、学習内容の整理をした。単元の導入で児童に「戦国時代に自分ならどういう町をつくりたいか。」と再び発問し自分の考えをまとめさせた。敵に攻めにくく、住みやすさを重視する考えが多く見られた。為政者と住民の双方の立場で町づくりを考えられた。社会の形成者としての自覚が芽生えてきたといえる。

〈第6時〉堺の町について、商人の立場から調べよう。

堺では商業が発展していたこと、豪商が自治を行っていたことを資料から読み取った。そして信長が金銭を要求し、支払わなければ堺を攻撃すると迫ったことを伝えた。この課題の解決に向けて「自分が堺の商人だったどうしますか。」と発問した。それぞれの立場で考え、当事者意識をもって解決策を考えることができた。

〈第7時〉秀吉がつくった大阪の町について調べる。

秀吉が築いた大阪は商業が盛んだった。同じく商業が盛んだった堺、商人が暮らしていた小牧と大阪の町づくりを比較させるために、児童には商業に着目させて、大阪の町づくりを考えさせた。「豊臣期大阪図屏風」を提示し、「茶屋や両替商、大道芸人を探してみよう。」と発問した。資料から、大阪は商業によって栄えたことを自然と理解していた。そして、秀吉が強大な力を持っていたことを理解した。そして、秀吉の町づくりについてふり返り、商業者の視点で信長と秀吉の町づくりを比較して考えを深めることができた。

〈第9時〉戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか、もう一度考える。

これまでのふり返りや町づくりの考えを記録したものの確認し、考えを整理させた。児童が町づくりについて当事者意識をもって考えさせるために、「戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか」を再度発問して聞き合った。資料12を見ると、蓄積されたふり返りを読み、他者との対話的な活動を取り入れることで、戦国時代の町づくりについて多面的・多角的に考えることができた。また、「自分なら…」という立場を意識した発問によって、戦国時代の町づくりについて当事者意識をもって考えさせることができた。

- ・町で商売ができるから、秀吉も信長と一緒に商業を重視していた。
 - ・大阪は、信長がつくった小牧とは違い、農民の家がなく、お店で町が埋め尽くされている。秀吉の物は豪華な物が多く、それぐらいすごい権力だったと思う。
- 【資料5 ふり返り】

5 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

ア 手だて① 児童生徒が当事者意識をもつことができるような教材や課題の設定

本実践では、単元を貫く課題として「戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか」を設定し、児童に考えさせた。立場を明確にすることで、児童は当事者意識をもって課題を考えることができた。また、第6時では「自分が堺の人々だったら…」という発問を児童に投げかけた。すると、信長の立場での考えに留まらず、堺に住む商人や、堺の町の支援者などの立場からも堺について考えることができた。立場を明確にした課題や発問の提示は、多角的に町づくりについて考えることができ、有効な手だてであったと考える。教材については、例えば、小牧には、土塁の一部や町名に名残が残っており、児童は自分と信長の町づくりのつながりを意識することができた。児童は、校外学習や日常生活で小牧山やその付近をよく訪れており、現在の様子と過去の様子を比べることができた。このように、現在の生活と信長の町づくりの結びつきに気づくことで、戦国時代の町づくりについて当事者意識をもって考えることができた。

イ 手だて② 社会的な見方・考え方を働かせながら、深く思考し、選択・判断・表現することのできる場面を設定する

課題に対して社会的な見方・考え方を働かせて深く思考するための学習活動を設定した。例えば、第3時では小牧と安土の町の様子を比較することで、川を利用した水運や商業の様子など小牧の町づくりの特徴を捉えることができた。また、堺の町が信長に攻撃されそうになったときの対応法を堺の商人の立場で考え、判断することができた。歴史の学習では初めての事象や多くの人物が登場してくる。苦手な児童にとっては、何か手掛かりがないと、歴史を遠い過去の出来事、他人事として学習してしまう。しかし、社会的な見方・考え方を働かせながら戦国時代の町づくりを追究することで、学習の視点が整理され、思考の方法が明確になったことで、町づくりについて深く思考することができた。非常に有効な手だてであったと考える。

ウ 手だて③ 社会的な事象や課題に対する自分の考えをまとめるふり返り活動

本実践に限らず、社会科の授業の中では、学んだことと考えたことの2つの視点でふり返りを書

くように指導してきた。さらに、小牧、堺、大阪のそれぞれの町づくりを学んだ後、「戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか」について考える時間を設定し、ふり返りを蓄積していった。授業の終わりに自分の考えを整理し、表現する活動に継続して取り組むことで、当事者意識をもって戦国時代の町づくりを考えることができた。また、ふり返りを蓄積したことで、児童の考えの変容が見られた。このようにふり返りは児童の学びに有益であるとともに、教師側からは学習の評価につながるものであり、大変有効な手だてであったと考える。

(2) 今後の課題 小学校

ア 手だて① 児童生徒が当事者意識をもつことができるような教材や課題の設定

単元を通して、立場を意識した発問を投げかけてきた。このような発問により多くの児童は当事者意識をもって考えることができたが、学力の低い児童は資料から離れた、根拠のない町づくりを考えているように感じた。このことから、小牧市が進めている「学び合う学び」を有効に取り入れて資料の読み取りを丁寧にさせるとともに、考えの根拠を資料に求めるよう日々指導をしていくことが大切だと感じた。また、児童が住む小牧を教材として取り扱った。児童の生活経験が異なる中で、信長のつくった小牧と普段の生活とのつながりを意識できた児童と、意識が不十分な児童で理解度に差があると感じた。このことから、児童にとってさらに社会とのつながりを意識できるような適切な教材が必要であると感じた。

イ 手だて② 社会的な見方・考え方を働かせながら、深く思考し、選択・判断・表現することのできる場面の設定

時間の経過を意識するなど、社会的な見方は常に意識して学習を進めた。一方で社会的な考え方については比較や、住民の生活を結び付けて考えるなどの活用に留まった。町づくりを比較する際も、多くの児童は川や家の配置など、これまでに学習した視点をもとに比較することができたが、学力の低い児童は、比較することが難しいように感じた。活動に入る前に、比較する視点を共有することが大切だと感じた。社会的な考え方については比較以外にも、分類したり総合したりするなどの考え方もあるため、必要に応じてそのような考え方を活用するのも一つの方法だと考えた。

ウ 手だて③ 社会的事象や課題に対する自分の考えをまとめるふり返り活動

ふり返りを蓄積していくことで、児童の考えの変容が見られた。一方で、ふり返りの内容にあまり変容が見られない児童も見られた。これは、自分の考えがうまくまとまらない、どのように書いたらいいのかわからないなどが理由として考えられる。ふり返りをただ書くだけでなく、交流する時間を設けることでよりふり返りの内容が深まったと考える。さらに、小牧や堺、大阪など町を中心に扱ったため、必然的に軍事や商業などに関するふり返りが多くなった。このことから、戦国時代の百姓の生活について学ぶことで、より多面的に戦国時代の町づくりについて学ぶことができたのではないかと感じた。そして、戦国時代の農業や漁業と町づくりの関連を考えさせることも一つの方法だと考える。

6 おわりに

実践を通して、児童生徒にとって身近な教材や学習課題は、当事者意識をもたせることにとっても有効な手段であると感じた。また、自分だったらどうするかという視点を与えたり、立場をはっきりさせたりすることで、児童生徒が社会的事象に対して自分の意見をもったり、発信したりすることにつながっていった。児童生徒の中で社会の形成者としての自覚が高まったと考える。課題として、社会的事象に対する児童生徒の意識の差やよりよい社会のあり方を追究する時間の必要性が挙げられる。これを解決していくためには、より社会を身近に考えられる教材の開発、他者の意見に触れる機会の確保、さらなる追究のための学習課題の設定や授業展開の工夫が必要であると感じた。児童生徒が社会的事象に触れ、自分の考えをもち、社会の形成者としての自覚を高められるよう、これからも実践を続けていきたい。